

東直子さん

[歌人、小説家]

小学生時代、2度の転校を経験した東さん。心に強く残ったのが、小学校4年生から5年生までの1年あまりを過ごした、福岡県糸島市での暮らしでした。そこでの体験を下地にした小説『いとの森の家』は、第31回坪田謙治文学賞を受賞。作品はNHK福岡放送局でドラマ化されました。そんな東さんに、小学校時代の思い出や、短歌の楽しみ方などを伺いました。



物語をつくり、その世界に入り込むことが好きでした

どちらかというとインドア派で、家で本を読んだり手芸をしたりするのが好きな子どもでした。本に関しては、冒険物や偉人伝、世界名作全集など、いろいろなものを読んでいました。

特に好きだったのは、児童文学作家の安房直子さんです。独特の言い回しがすごくきれいで、そのファンタジックな内容と世界観にひかれました。言葉の「美しさ」というものを、私は安房さんの本を読むことで発見しました。

読むだけでなく、物語をつくることも好きでした。福岡市内のマンモス校にいたころ、友だちと学校探検をして発見した資料室で、いろいろな道具を何かに見立てて、お芝居をして遊んでいたのを覚えています。それが楽しくて仕方なくて、教室に戻ることをすっかり忘れ、先生に叱られてしまったこともありました。

今もつながっている
いとの森の小学校の友だち

その後『いとの森の家』の舞台でもある福岡県糸島市(当時糸島郡)に引っ越したときは、滅多にこない転校生ということで、村の人から非常に珍しがられました。ふつうの町にある小学校なら、1年限りの転校生はすぐに忘れ去られると思うのですが、数年前に久しぶりに訪れたときにも、地域の皆さんは、私たち家族のことをよく覚えていて、声をかけてくれました。

小説は、主人公の加奈子と、親友の

咲子の物語が中心で、それはそのまま、私の小学校時代の人間関係が基になっています。大人になった私と友人を見て、友人の姉に「2人とも、雰囲気が全然変わってないね」と言われました。

実は、作中の方言チェックは、その友人姉妹がしてくれました。

短歌には
残す言葉にセンスが宿る

小学校の詩歌の指導法や、短歌作品の意味を質問されることがあるのですが、詩歌とは「余白」のようなもので、言葉で説明できない感覚を直接受け取ってほしいところがあります。

全てを説明し尽くすより、全部言い切らないほうが、相手の想像力をかきたてる面白さがある。創作する側は、言葉を尽くした「足し算」ではなく、「引き算」によって残した言葉で、読み手にいろんな感覚を味わってほしいのです。

お笑いにしても、一からくどくど説明されるより、より短い言葉でズバツと言われたほうが、破壊力があって面白いですよ。短歌は文字数が決まっていますから、どれだけ必要なものを残し、何を削るかに、書き手の個性、センスが宿ります。

そのとき残したいのは、多くの人が共感するような言葉よりも「みんなはそう思わないだろうけれど、自分はこう思う」という部分です。他人の目を気にして優等生的になると、個性はどんどん消えていきます。自分が思った「妙なこと」をこそ、披露してほしいです。

短歌は、普段の会話で言わないようなことを拾う、「器」のようなもの。そして、それを表現として残せる面白さがあります。自分の思いに気づくきっかけとして、短い言葉は向いていると思うんです。

子どもの柔軟さを
殺さないようにしたい

ワークショップや大会の審査などで子どもたちの作品を読むのは、とても楽しみです。生き生きとした自由な表現にハッとさせられ、自分が子どもだったときの感情を思い起こさせてくれます。大人社会の固定観点に縛られずに自分の感覚を表現できるのは、子どもならではの力です。

小学生の間は、素直に表現ができる時期。活発な子どもがポンポンくり出してくる言葉、じっくり考える子どもが慎重に選んだ言葉、どちらにもその子なりの良さがあります。結果を急がず、その子のペースに合わせて、発したい表現を待つことが大切だと感じます。

そのためには「いろんな表現をしてもいいんだ」という安心感をもてるのが一番大事なように思います。小学生の頃って、それぞれが思ったことを伸び伸びと表現してお互いがそれを認め合えるし、いろんなタイプの子と無邪気に友だちになれる柔軟さがありますよね。それを殺さないでほしいです。

表現の上でもお互いを認め合える、やさしくておおらかな教室であつたら素敵ですよ。

PROFILE

ひがし なおこ ● 1963年、広島県生まれ。1996年『草かんむりの訪問者』で第7回歌壇賞、2016年『いとの森の家』で第31回坪田謙治文学賞を受賞。歌集『青卵』『十随』、小説『とりつくしま』『晴れ女の耳』、短歌の入門書に『短歌の詰め合わせ』、児童書に『くまのこのるうくとおぼけのこ』など著書多数。最新作の小説『階段にハレット』は表紙の装画も手がけた。東京書籍『新しい国語5』には短歌の作品が紹介されている。

**短歌は、自分の思いをすくいとるための「器」。
表現することの楽しさを味わいましょう**